

■伊藤証信 思想伝道家。“無我愛”運動を始め、半世紀以上に渡って、時流に巻き込まれながら、広く影響を及ぼした。

いとうしょうしん

三つの反乱・1876＝ 三重県員弁郡久米村坂井(現在の桑名市坂井)で、農家の伊藤清五郎とこはるの長男(先にいた2人の兄がいずれも夭折)に生まれる。幼名を清九郎、通り名を常吉と言ひ、のち、弟為吉と妹こしが誕生。父は、成人して天涯孤独になり、渡辺こはるに入婿するも、渡辺姓を名乗るのを拒否して、義父喜助との間にしこりとなるが、無学ながら頭が良く正義感が強く、村内や他村とのめごとの仲裁を買って出、人望を求められ、坂井ほか四字の代表者になるほどであった。

明治14年政変1881＝ 5歳：

新体詩抄・1882＝ 6歳：小学校に入学、成績は良かったものの蒲柳の体質で、病気で欠席することが多く、その都度、母の手厚い看護で生き延びる間、婿と舅の衝突が激しくなり、近所の寺の説教を聞きに行く両親と、手次の真宗大谷派円授寺に入り浸りになった義祖父喜助双方に連れられ、寺に出入り、

内閣発足・1885＝ 9歳：

帝国大学始・1886＝10歳：尋常科を何とか卒業。上級学校への進学を断念し、昼間は家業を手伝ひ、村の夜学会に通って勉強、国民之友始・1887＝11歳：僧になりたい、ならせたいという父子の心の一致で、母方の檀那寺円授寺に通うようになり、初の対等条約1888＝12歳：正式に出家を志し、父方の檀那寺増田の源流寺から、久米村の遍崇寺に移るも、思ったようでもなく、帝国憲法発布1889＝13歳：円授寺に戻って得度し、名を証信(正式には證信)と改める。円授寺その他の寺で小僧、役僧を務めた後、大津事件・1891＝15歳：大垣にあった真宗大谷派美濃教校に、附属科での猛勉強の末、入学、直後に濃尾大地震で校舎崩壊、日清戦争始・1894＝18歳：編入試験を受けて、京都の真宗中学に進むが、仏教への疑問が湧き、普通の高校に進学したいと思い、白馬会・1896＝20歳：墮落の極に達していた東本願寺は、清沢満之ら5人の若手僧侶が本山改革の狼煙を挙げ、徳川時代に始まる末寺子弟養成機関高倉学寮から、仏教学の研鑽を主とする真宗大学を分離設立、

八幡製鉄始・1897＝21歳：

田中正造直訴1901＝25歳：病気で1年休学後、円授寺住職、両親を説得して受験するも不合格、そのまま卒業して真宗大学に進むと、清沢満之の思想と人柄に惹かれ、その影響を強く受けるもなお、教団への失望は変わらず、学校制度上の大学になって東京巣鴨に移転した真宗大学の本科を卒業し、研究科に進み、巣鴨村庚申塚近くの田崎村長邸内の別棟を「古白庵」と名付け、山田文昭と共同生活、トルストイから人間愛の影響を受け、

日比谷公園・1903＝27歳：

日露戦争始・1904＝28歳：真宗大学の月刊雑誌「無尽灯」に、翌年にかけて、俳句、短歌、随筆、論文を頻りに寄稿、*父が病気で倒れたとの報に、帰郷し看病するうち、その枕辺で突然靈感に打たれ、仏教の“無我”とキリスト教の“愛”が一体になったような“無我の愛”を悟る。

日露戦争終・1905＝29歳：

父の小康で大学に戻るも、自分の思考の異変に驚くも、とりあえず、他人を愛する’ことを実行しようと、少年たちを集めて巣鴨村実業夜学会を開催、大学で例年開かれる信仰談議に話をすると、大半の学生が笑いにするなか、何人かが「古白庵」を訪れ、安藤現慶と和田幽玄を協力者に「金羅会」を始める。やがて、近くにあった「大日堂」で、村民の賛成を得て、修養克己の生活を始めるとともに、人生相談のチラシ宣伝すると、多くの人が来訪、「無我苑」と改め、機関紙「無我の愛」を創刊して、全国に知られるようになるが、有名なで最初の来訪者が革命僧内山愚童であったように、社会主義と宗教との関係はあいまいで、日露戦争に対しても無自覚であった。満之の後任の南条文雄校長が保守一辺倒で、無我愛運動を進めるのが困難になり、やむなく、僧籍を返上し真宗大学を退学、脱宗号を発刊すると、大きな反響を呼び、徳富蘆花、幸徳秋水、堺利彦、網島梁川ら著名人が続々賛辞を寄せ、河上肇が学習院の教職を辞して「無我苑」に入苑する一方、論敵だった「平民社」が解散したことに衝撃、安藤も実家に連れ戻され、

満鉄発足・1906＝30歳：

“修行未熟”を理由に突然閉鎖、河上肇はじめ著名人の反対続くも変わらず、山口県の徳山女学校校長で与謝野鉄幹の実兄赤松照輝に招かれ、田中正造に会って、彼こそ“無我愛”の体現者と納得後、現地に赴任、創刊された校友誌「時習」に随感録を連載し、東京の社会主義者にも送っていたことが縁で、関心あった“無我愛”の証信が隣村に転住してきたと知った、山口県の医家の長女に生れながら、不幸な育ちから自閉症になっていた竹内あさ子から、自らの苦しみを告白すついでに、結婚を申し込み書簡が送られ、

伊藤博文暗殺1909＝33歳：

韓国併合・1910＝34歳：あさ子と“あるがまま”の結婚、生涯最も幸せな克己生活を送り、ようやく自信をつけるや学校を辞して、ともに上京、麹町の真宗会堂に留守番兼小使として住み込み、独自の宗教観を示す雑誌「我生活」を発刊するが、外出には常に警察の尾行がつくありさまで追い出され、淀橋の一軒家に移るも、大逆事件が幕開け、和田幽玄の勧めで千駄ヶ谷に転居、妻あさ子に支えられ、「我生活」をもとの「無我の愛」に改題(第二次)。

大逆事件判決1911＝35歳：

大逆事件判決で、内山愚童も含む12名が刑死したことを聴くと、論文「大逆事件の揭示」を掲載して発禁、5日間入獄。妻あさ子は、肺結核になり子宮筋腫も再発、故郷に転地療養、千葉寛舜が入社して来て休刊を免れるが、女性読者からの手紙も増加、そのうち中島ふみ子に恋心を抱き、彼女をモデルに、「無我の愛」に、変名での小説「しづ女」を掲載、それを讀んだあさ子が激怒、関係を修復すべく、両者の言い合いも全て掲載するうち、センセーションとなり、「無我の愛」は廃刊、「我生活」社も閉鎖に至る。

第一次大戦始1914＝38歳：

東大赤門近くで出版社「日月社」を開くも、上手く行かず、翌年には帰郷、以後、表面に現れない。一方よりを戻した妻あさ子は、西川文子の主宰する新真婦人会に関わり、与謝野晶子と知り合い、

民本主義・1916＝40歳：

和田幽玄のいた(中外日報)主筆に招かれて、あさ子とともに京都に移り、毎日の社説と「信仰問答」欄を担当、東京、京都で開いた宗教座談会が大成果を挙げると、辞して東京に戻り、神田で「精神運動」を發刊、千葉寛舜が編集主役になって好評、生活の足しに開店したミルクホールも著名人が出入りして、手狭になり、

大暴落・1920＝44歳：

あさ子は、平塚らいてふが市川房枝らと結成した「新婦人協会」にも参加し、女性の地位向上運動に活躍。原敬首相暗殺1921＝45歳：東京中野に移転し、「無我の愛」を発行(第三次)するが、今度は、あさ子が不倫を起こし、「別れ」を掲載、水平社結成・1922＝46歳：予告なく廃刊して、「愛聖」を創刊。講演出張の激増で、編集から経営まで一切をあさ子に委ねる。関東大震災・1923＝47歳：大震災に、朝鮮人を保護し、交流あった大杉染の虐殺に悲嘆、同朋の大衆食堂を手伝うなどするうち、護憲三派圧勝1924＝48歳：経済的に行き詰まり「愛聖」を廃刊。安藤現慶らの支援を得て、*西三河の農村青年団体「電灯団」の招きに応じ、若き日の満之の縁もある西端(現・碧南市)に移住、仮寓を「電灯窟」と名付け、雑誌「愛と真」を創刊、あさ子は染焼を習得し茶碗を制作すると良く売れ、生活を支える収入源になる。「廃刊になってしまいが、地元農村青年への指導は続いて、思想的影響を及ぼし、著書「哲学入門」「無我愛の哲学」が高い評価、

海軍軍縮条約1930＝54歳：

満州事変・1931＝55歳：帝人疑獄事件1934＝58歳：生活も安定、全国からの多くの寄付で、「電灯窟」の周りの土地を購入し、「研修道場無我苑」を建設し、芥川直木賞始1935＝59歳：「無我愛」を発行(第四次)、

二二六事件・1936＝60歳：

「万教協和聯盟」を提唱するも、日中戦争始・1937＝61歳：挫折。活路を満州に求めるとともに、神道に関心を寄せ、超国家主義を吹聴するようになり、健保+総動員1938＝62歳：第二次大戦始1939＝63歳：

日米開戦・1941＝65歳：

仏教主義で奮闘する和田幽玄が死去。4回に亘って満州視察、国家の手先ようになって行くなか、年金+総武装1944＝68歳：紙の配給停止により休刊、

敗戦・1945＝69歳：

新憲法公布1946＝70歳：第五次「無我愛」を発刊すると、戦争責任を追求する声が増え、平和運動に再生を求め、極東裁判判決1948＝72歳：三大事件・1949＝73歳：世界連邦運動に共鳴して入会、「無我苑」を支部にし、次々と記事を掲載し、記念講演会まで開催

独立回復・1951＝75歳：

メーデー事件・1952＝76歳：広島での世界連邦アジア会議にはあさ子とともに出席するが、自衛隊発足1954＝78歳：歩行も困難なほど老化が進み、この年の「無我愛」同朋の集いを最後に、外出することが無くなり、55年体制始・1955＝79歳：「無我苑」で、無我愛50年と喜寿の祝賀会が開かれてまもなく、腸閉塞で入院手術、回復しても認知症、国連加盟・1956＝80歳：あさ子が脳溢血で死去、養女の手で「無我愛」の発行が続けられるも、

なべ底不況・1957＝81歳：

美智子妃・1959＝83歳：伊勢湾台風で、「無我苑」が大破して、ついに休刊、TV宇宙中継始1963＝87歳：老衰による心臓麻痺で没した。平塚らいてふは「柔軟な魂の自由宗教者伊藤証信先生とあさ子夫人を永遠に記念する」書を贈り、1970年には、千葉寛舜が耕堂の名で「無我愛運動史概観」を書いている。